イムサの隠し事

イムサは、さっそくどんぐり入りポウを口にした。市に入った時から、目星をつけていたものだ。ドナウト師は、背後で、じっと３０１５番地の見習いを待っている。

イムサは、むしゃむしゃポウを食べ続けた。

「……だが、以前もそう言ったはずです」

男の責め口調が、背後から聞こえた。

「それで昨日、あなたの家を伺ったのに、村回りに出たというじゃないですか。言うこととやってることが違うのは、どういうことですっ」

ドナウト師がなにか答えた。どうやら、男はドナウト師に話しかけているようだった。

今度は、硬い女の声がした。

「ええ。それで来たんです。……ちょっとよろしいですか？」

女は、椅子を引いて座ったようだった。

「もう、いつものように流してもらっては困るんです。遅れれば遅れるほど、事態は悪化していくばかりですよ」

「その話は、よそでしようや」

ドナウト師は言った。イムサは、咀嚼音を抑えた。

「いつ、『資料』をお渡しくださるんですか」女は、ひやりとするような強い口調で訊ねた。

「わかってるわかってる。だが、すべてを訳(やく)し終えたわけじゃないのだ。まだ二割ほど残って……」

「いつ終えられるのです？」と女。

「……それは、なんとも言えんよ。村回りがあるのでな」

「あなたは怖がっていらっしゃる」

今度は男が話した。

「でも、『資料』を渡さない方が、我々に多大な不利益をもたらすことになるんですよ。あなたや、もちろん、そこのぼうずも」

冷たい手で胃を掴まれた気分だった。イムサは、鳥肌が立った。

彼らの視線を感じたが、イムサは無視した。ポウの味がまるでしない。

「三日後まで待ってくれ」ドナウト師は、イムサに聞かれたなど気づきもせず、疲れたように言った。

「三日後に、どこで？」と男。

「ええと、狩りの村の玄関口(エテリセ)では、どうか？」

「なににかけて誓うのです？」女が冷たく言った。「あなたは、師の主(あるじ)の〈賢(アヤリ)〉

にかけて誓い、それを破っている。他になににかけて誓うというんです？」

ドナウト師は、沈黙した。

「言っておくが、逃れようとしても、そうはいかない」男が言った。「我々の〈目〉は、常にあなたを見張っている。あなたに残された道は、二つ。自分の命を懸けるか、もしくは、子（ズィード）たちの命をかけるか……。この意味、わかりますよね？」

イムサは、そうっと席を立つと、ただちに広場の隅へ駆けた。

口に押し込んだポウが、苦しかった。笑い合う見習いたちが、遠く感じる。

しばらく座っていると、ゆらりと影が落ちた。

「こんにちは、少年」

見知らぬ男が立っていた。くたびれた外套、少し伸びた口ひげ、ぐだぐだ動く足は、暇そうに見えた。

彼は、食べ終えた棒付き飴を、指の間にくるりと挟み、胸に指を三本当てて軽く頭を下げる、正式な挨拶をした。

「……こ、こんにちは」

イムサも、座りながら、胸に指をあて、頭を下げた。

「君、さっき、あそこの食事台で食事していたよな」

男は、顎でむこうをしゃくった。

イムサは、ゆっくり頷いた。それから、男を観察した。髪を無造作に束ね、粗

野な身なりをしているが、静かな猟犬のような目つきをしていた。
「そのとき、師の人に気がつかなかったか？　男と女の二人なんだが」
「……師の人かどうかわかりませんが、男と女の話し声は聞こえました。……まあ、こんなにアベドがいるから、当然だけど」
男は、ふっと笑った。悪い笑顔ではなかった。ふわっとした布団を連想させた。
「そうか。……いや、俺を警戒する気持ちはわかる。突然、変なことを聞いて悪かったな」
彼はそれから、「いいか？」と訊ねて、傍に座った。風と草と、甘い飴の匂いがした。
「こう見えて、俺は、ちゃんと仕事をしているアベドだ。守りの人の中の〈野駆(のか)け〉って仕事。……君、〈野駆(のか)け〉って知ってるか？」
イムサは、肩をすくめた。
「いわゆる、情報収集屋だ。王家、光の民(シスルア)にお仕えしている。あまり口外してはいけないんだが」
男はそう言うと、首元からなにかを引っ張りだした。円形をした、平たい金属だった。縁には、不揃いに穴があいている。真ん中には、王家を示す、十の光線を放ったひし形の紋章が刻まれていた。
怪しい者じゃないだろ、と、彼は眉を上げた。

「それで、彼ら、なにを話していた？」
〈野駆け〉の目の奥に、すっと硬い光が宿った。イムサの口は、気づけば洗いざらい話していた。
「ありがとう。君はいい子だな」
そう言われて、イムサは初めて、自分が誰かを信用したかったことを知った。
〈野駆け〉は、くつろいだ様子で広場を眺めていたが、やがて言った。
「なあ、イムサ。これから村回りに行くんだろう？　その時、君の師について、君の意見を聞かせてほしいんだが、どうかな？」
「……なんで村回りに行くと知っているんです？」イムサは、はじめに問うた、
「見張っていたからだ」
〈野駆け〉は、隠すことではないというふうに言った。
「だが、悪く思わないでくれ。実際、君たちに、俺は用がないんだ。あの師の人たちに用があるんでね」
「その目的を、言うつもりはないんですね？」
イムサは、すぐに予想した。
案の定、〈野駆け〉は「君は呑み込みが早いな」と言って、片眉を上げた。
「まず君は、俺に会ったことは、誰にも言ってはいけない。君は、ここで見聞きしたことを、なかったことにするんだ。……大丈夫、そんな顔をするな。君たち

には、危険な目は絶対合わせない。だが、恐ろしいのは、君がなにか知ろうと動くことだ。だから……、約束してほしい。このことは絶対、口外なしだと」

イムサは、ゆっくりと頷いた。さっきまで陽気に見えていた広場が、怪しく踊り狂うアベドの集団に見えてきた。

「彼らは、もういない」

〈野駆け〉は、立ち上がって言った。二人の師の人のことを言ったらしかった。

「さて、君は冷静で頭の回るアベドのようだし。どうだろう？　ただ師を観察して、俺に話す。この仕事を……、やってみてはくれないか？」

イムサは、しばらく黙って考えた。

「見て、話すだけですか」

「ああ。なにはともあれ、明日の早朝に、再び話せると嬉しい。その気になったら、宿の裏に来てくれ」

〈野駆け〉は、イムサの返事を待つことなく、アベドの群れへ姿を消した。

イムサは、じっと待った。そして、ドナウト師が見習いたちを連れてやって来るのを見ると、何事もなかったかのように合流した。

自然の村でドナウト師は、長く長く喋り続けながら、農作地帯を避けるように、

玄関口(エテリセ)へ戻った。

「よくないものがあるからな」師は言った。

イムサは、彼がなにを隠しているのか、知りたがった。彼の一挙一動に、ぴりつく自然の人や商の人に、手掛かりを見出そうとした。

〈野駆(のか)け〉に会ったのは、次の日の朝だった。半信半疑で宿裏に出かけたイムサの目に、しっかりと彼の姿がうつった。

〈野駆(のか)け〉は、ただ単に頷いた。まるで、来ることを分かっていたかのようだ。彼はそれから、ドナウト師について聞かせてくれと、単刀直入に訊ねた。

イムサは、この無駄を話そうとしない姿勢の男を、信頼し始めた。だから、この男に少しでも認めてもらおうと、先日の一切を語った。

だが、〈野駆(のか)け〉は、顔をしかめた。

「今後必要なことだから言っておくが、君の見解は必要ない。『そう思った』とか、『そう見えた』というのは不確実だ。大事なのは、そう言った、という事実だけだ。君が話したいまの内容にも、君の補正がかかっているなら、俺は今後、君を信用しないぞ」

彼は冷徹だった。しかし、イムサは、「わかりました」と淡々と答えた。白黒つけてくれたほうが、こっちもなにをしたらいいかわかりやすいと思った。

「ならいい。最後に聞くが、ドナウト師に接触するアベドは、いたか？」

「鳥便(とりびん)の獣の人、宿を訪ねるために話しかけた薬の人三人、それだけだったと思います」

「わかった。……それじゃあ、君にこれをやる」

〈野駆(のか)け〉は、外套の胸の隠しから、一冊の本を取り出した。よく読みこまれており、表紙が外へ丸まっている。題名は、『羊の歌』とあった。

恐る恐る受け取ったイムサは、その作家名に目を見張った。

「カメイユ……！」

「そうだ。その作家の価値は、見習いでも知っているだろ？」

カメイユは、エイネーで最も権威ある作家の一人だった。様々な歌をつくり、いくつもの有名な物語を書いている。四百年前に亡くなっているが、それでも、彼の作品には時の流れに消されない力を持っており、いく人もの有識者に影響を与えた。イムサも何冊か読んだことがあるが、しかし、『羊の歌』という本は、存在自体、知らなかった。

「それを売って、金をつくるんだ。それほどにはならないかもしれないが、万が一のときのためだ。菓子やなんかに使うなよ？　……。君には、これを渡す意味が、わかるよな」

イムサは、ざわりとして、〈野駆(のか)け〉を見た。彼の鋭いとび色の目には、得も言われぬ切迫の色が浮かんでいた。

「君は、本当によくやってくれている。だが、もう少しだけ力を貸してくれ。これは、その礼だ」

「……。これについて、質問することは、だめですか」

「ああ。すごく心地が悪いのはわかってる。けど、許してくれ。俺には、こうしてやることしか、できないんだ」

イムサは、半分だけうなずいた。

「けれど、これをただの見習いが売るとなると、持っていること自体、怪しまれますよね？」

「〈育ての者〉から祝いで貰ったと言えばいい。だが、自分にはわからん趣味だから売る、と」

「……わかりました」

「ん、いい子だ。次も宿裏で。夜に」

男は去った。

イムサは、朝食に戻る気になれなかった。通りの向かいに座り、考え込んだ。

『我々の〈目〉は、常にあなたを見張っている。あなたに残された道は、二つ。自分の命を懸けるか、もしくは、子（ズィード）たちの命をかけるか……。この意味、わかりますよね？』

ここずっと、そう言う男の声がつきまとっている。

イムサは、〈野駆け〉に聞きたくてたまらなかった。けれど、自分の予想した答えが返ってくるのも、怖かった。

（子は、見習いの象徴。つまり、彼らは、俺たちの命を狙っているということですか？　俺たちは、ドナウト師のゆすりに使われると、あなたはそう考えているんですよね？）

イムサは、心の中で〈野駆け〉に訊ねた。

答えはない。けれど、手の中にある『羊の歌』が、ある意味、それを確証づけるものになっていた。

『金を作れ』〈野駆け〉は言う。『万が一のために』

（逃亡用だ）

イムサは、ふっと思った。

向かいの宿から、ドナウト師が出てきた。あたりを窺い、花壇に座る。

顔色は、悪かった。

『羊の歌』は、獣の村までの中間玄関口で売った。ドナウト師が昼食を買っている間だった。

獣の村に着くと、シュグレーデン長が出迎えた。シュグレーデン長の快活な笑

いに、イムサは慰められた。

「自然の村では、なにが起きているんですか？」

最後に、イムサは長（おさ）に問うてみた。ドナウト師が避けて教えてくれなかったことを、彼なら知っていると思ったのだ。

シュグレーデン長（おさ）は、〈見えない死〉という新しい呪いのことを教えてくれた。

だが、ドナウト師は、あまり続けたくないようだった。

「あなたは〈見えない死〉のこと、知っていますか？」

竜を見た夜、再び宿の裏で〈野駆（のか）け〉に会ったイムサは、情報収集屋である彼に訊ねてみた。

〈野駆（のか）け〉は、じろっとイムサを睨んだ。

「なぜ〈見えない死〉のことを言う？」

「では、存在自体は、知ってるんですね？」

〈見えない死〉の質問に、男が初耳ゆえの困惑を見せなかったので、イムサは、彼は知っているんだと踏んだ。

図星らしく、〈野駆（のか）け〉は彫像のように固まった。

「お前に話すことはないよ」

彼は目をそらした。

「今日も、ドナウト師に対する接触はなかった。……金は作ったんだな？　よし。

今日はこれで終わりだ。ゆっくり休め」

「なぜ話してくださらないんです？　俺もエイネーに住んでるアベドの一人なんですよ？　なにが国で起こってるか、知りたいじゃないですか」

〈野駆け〉は、ため息をついた。

「まだなにもわかっていないんだ。それに、一方的で悪いが、俺はお前に聞くだけで、お前は俺に聞いちゃいけない。いままでもこれからも、例外はなしだ」

〈野駆け〉の目は、暗がりで鋭く光った。

「……わかりました」

「よろしく頼む。……また、夜中に会おう」

その翌日。

ドナウト師は、休暇を与えると言った。

遊び惚けて眠る仲間たちをよそに、イムサはクワーレンに硬貨を渡すと、真夜中に部屋を抜け出し、〈野駆け〉を探した。

月明かりの中、〈野駆け〉は、葉巻をもてあそんでいた。

「明日は休講になるんです」イムサは言った。

「ああ、知ってる」

〈野駆け〉は頷いた。

「君の情報が正しければ、もしくは、ドナウトが心変わりしていなければ、彼は、

ここで『資料』の受け渡しをしなくてはならない」

「はい」

イムサは、受取りのために二人の師の人がここへやって来ることを考えると、寒気がした。

「案ずるな。彼が渡せば、君もこんなことはやらなくて済むようになる。……もう少しだけ我慢してくれ」〈野駆け〉は、静かに言った。

「俺は、我慢していません」

「そうか……」

〈野駆け〉は、ぼんやりと葉巻をくわえ、火打ち箱を取り出した。石と金属片を打ち合わせ、火花が生まれる。その明かりが一瞬、彼の疲れた顔を照らしだした。

「早く行くんだ。もうお前は、眠らなければならない」

〈野駆け〉は、石を打ち続けた。

だが、イムサは、ほとんど眠れなかった。火花で、ちかっちかっと浮かび上がる〈野駆け〉の顔が、何度も蘇った。

早朝。イムサは、少女たちとともに魔法陣を見た。光る魔法陣を見ても、イムサの木は晴れなかった。

だが、その時、見知った影を見つけ、身が硬直した。

〈野駆け〉だった。なぜこんなところに？　なにかあったのだろうか。

イムサは、さりげなくリリたちから離れ、彼に近づいた。

「よう、久しぶりだな！」

〈野駆け〉は、イムサに気づくと、親しげに頭を撫でた。イムサは、唖然とした。

「なにしに来たんだ？」と〈野駆け〉。

その輝く瞳の中には、あの猟犬のような鋭さがあった。

「魔法陣を見に来たんです」演技をしていると見抜いたイムサは、小さく答えた。

すると、〈野駆け〉は、悲し気に笑った。

「みんなに言っといてくれ。鼠どもが現れて、駆除に大変だから、宿には戻るなって。それから……あとで管理塔に来い。今後のことを話す」

〈野駆け〉とは、そうして別れた。

鼠のことを少女たちに伝えると、イムサは、一人で管理塔へ向かった。

中に入ると、広間の長椅子で、〈野駆け〉が足を組んで待っていた。

「やあ。昼飯がまだじゃないか？　どこかで買ってくるか？」

〈野駆け〉は、話の核心にすぐに触れなかった。その変化に、イムサは警戒した。

「いいえ。あまり腹は減っていません」

「ふむ。君は、アスハリエティク国の星狩る者みたいだな」
その意味はわからなかったが、イムサは訊ねなかった。いまはそれどころではなかった。
「なにがあったんですか」
隣に座ったイムサに、〈野駆け〉はしばらく躊躇って、何も話さなかった。
「……別の宿を手配した」
ようやく彼は言った。
『二本槍』という宿を知ってるか？　ここを出て、右に曲がったすぐのところだ。そこが、今晩泊まる場所になる」
彼は、イムサの手をとって、地図を指で描き、覚えさせた。
「宿を変えたってことは、つまり、ドナウト師は、『資料』を渡さない方を選んだってことですか」
〈野駆け〉は、だが、焦って声高になるイムサを、平静な目で見下ろした。
「小さく話してくれ、イムサ。……いいか、まず、君の師の判断は、まだ行動にでていない。だが、これからのことを考えて、君らを他の宿に移すことにしたんだ。『二本槍』は、どこよりも守られた場所だ。安心して眠ることができる」
「つまり……？」イムサは〈野駆け〉を見上げた。「俺たちはまだ、気を抜いちゃいけないってこと？」

〈野駆け〉は、座り直してイムサに向き直った。その目には、静かな決意があった。

「君に、あることを伝えなくてはならない。それは、追手の考え方についてだ。残酷なことだが、いまとなっては、教えておく必要がある。……やつらは、手に入れるためなら手段を選ばない者たちなんだ。それがどういうことか……つまりそれは、ドナウト本人ではなく、君たちを使って、ゆすり交渉をはじめる可能性があるということなんだ」

「ええ、わかっています」

イムサは、やはり予想は当たっていたと思った。反対に〈野駆け〉は、彼の反応に窮した。

「なんだ？　ずいぶん肝が据わっているな」

「あなたが本を渡して、『これを売って金をつくれ』と言ったとき、逃亡用なんだと思いました。万が一のためにって、釘も指しましたし。そういうことでしょ？　だから、他のやつにも分けたんです。一人よりも、安全だと思ったから」

〈野駆け〉は、ふっと息を吐いた。

「どうやら、君を軽く見過ぎていたみたいだ。そこまで考えているとは」

イムサは、嬉しくなかった。握る手に、どんどん汗が湧いた。

「ドナウト師はどうなるんです？　俺たちは？」

「心配するな、イムサ。俺は『二本槍』で、夜通し君たちを見張るし、仲間も大勢そこで見張る」

〈野駆け〉は、少年の目をのぞき込んだ。

「君は、エイネー一安全な宿で眠れる。追手など絶対に入れない。そしてドナウトは、必ず私がいい方向へ向かわせる。絶対だ」

イムサは、頷いた。〈野駆け〉の目には、わずかながら後悔の色が浮かんでいた。

「君はいい子だな」彼は言った。

彼と会ったのは、それが最後だった。

翌日、『二本槍』でドナウト師からの伝言を受け取ったイムサは、まだ師は生きているんだと知った。……ということは、『資料』を無事に渡したということなのか。

広場で再開したドナウト師は、何を言うかと思えば、行先をつくりの村から師の村へ変更すると言った。

これに、イムサは困惑した。なぜ事前に知らせてくれなかったんだ？　〈野駆け〉は、ドナウト師をいい方向に向かわせたのか？

しかしながら、焦るドナウト師を見る限り、どうやらそうではなさそうだった。

イムサは、胃がひっくり返りそうだった。それは、ドナウト師が自分たちを『顔

寄せ亭』に預け、どこかへ消えてしまったとき、最高潮に達した。

ドナウト師は、まだ『資料』を渡していないのかもしれない……。俺たちを辺鄙な店に残し、彼は逃げたのか！

〈野駆け〉に会いたかったが、彼から次の集合場所を告げられなかったことを、イムサは思い出した。

……失敗したのだ。いい方向に、向かわせられなかったのだ。

イムサは、耐えきれなくなった。〈目〉とやらに狙われているのに、呑気に外へ出て雪合戦をしようとする仲間たちに、彼は咄嗟に、待ったをかけた。

気づいた時には、もう遅かった。イムサの口は、真実を伝えようと勝手に動いていた。

◆

聞き終わっても、誰一人身動きしなかった。

外はすっかり暗くなり、雪が激しくなってきていた。燭台の蝋燭には、厚く蠟が重なっていた。

だらだら垂れるその蠟を、見習いたちは、じっと見つめた。

クワーレンは、隠しの巾着の意味をようやく知って、その存在があまりにも重

く感じた。
ようやく口を開いたのは、チャルーだった。
「で、お前はそれを、だれにも話すなって言うのか？」
イムサの虎色の目が、かっと光った。
「お前、いままでなにを聞いていたんだ？　光の民（シスルア）に仕える〈野駆（のか）け〉がそう言ったんだぞ。なんで従わない？」
「だって、こんなのおかしいよ！」言ったのは、マウリンだった。「守りの人の〈警備の者〉を呼んで、捕まえてもらおうよ！　その……〈目〉ってやつ！」
「でも、そしたら、最初から〈野駆（のか）け〉さんがそうすることができたんじゃないかしら？」
エネーリスが考え込む顔で言った。大きな目が、恐怖で潤んでいる。「〈野駆（のか）け〉さんが、話さないよう言ったのは、なにか……なにか理由があるのよ……」
クワーレンは、懐の巾着に触れた。
「……これで、どこまで逃げられる？」
彼は、みんなの前に巾着を出した。
みんなは、イムサの話が現実味を帯びてきて、ぶるりと震えた。
「それは、見習い村まで行ける鳥便（とりびん）の運賃だ。俺のと合わせると、六人分弱ある」
イムサも、隠しから紙の包みを出した。

「いいえ、無理よ」リリが、束ねられた髪を振って抗議した。「あたしたちだけで、ここを抜け出せるとは思えない。第一、ドナウト師は、ここから逃げて、あたしたちを売ったってことになるの？　それとも……」

「わかった！　プェツアーに相談してみよう！」

マウリンの言葉に、とうとうイムサは激怒した。

「無言の誓いを立てたのに、さっきからなんなんだ！？　俺は、話すなと言われたんだ。でも、君らに話すべきだと思って話したんだ。……なのに、少しも尊重なしかよ！」

「は？　なにをいまさら言うんだよ。俺たちの命がかかっているのに、俺たちに黙っていたお前も悪いだろうがっ」

チャルーは歯ぎしりした。イムサは、ぱっと彼の胸ぐらをつかんだ。

「お前になにがわかるっ。お前は、あのときあの席に座って脅しを聞いていた俺じゃねえだろ。〈野駆け〉のことも、なんにも知らないだろうがっ！」

「いいや、知ってるさ。その〈野駆け〉のおっさんが、ぜんぜん使えねえやつってことがな！　話すなばっかり言って、いざというときにいねえなんて。そんな馬鹿なやつに従う方が馬鹿だ！」

「ちょっと、喧嘩している場合じゃないでしょ！」

リリが止めに入ったが、二人の少年は取っ組み合った。

「ばーか、ばーか、ばーか！」

チャルーが煽るので、クワーレンも慌てて彼を羽交い絞めにした。

「やめろよ！　見つかったらどうするんだよ！」

それでイムサも、ようやく攻撃をやめた。チャルーは、ふんすか鼻を鳴らした。

と、その時だった。

階下で物音がし、だれかが登って来た。

全員、息が止まった。

見つかった！？

「下まで聞こえたわよ？」

女の声だった。そうして現れたお下げの女の顔に、クワーレンたちはどっと力を抜いた。

「リトゥアーラ！　おかえり！　いまね……！」

マウリンは続けようとしたが、慌てて飲みこんだ。

「あの……いまね、……チャルーとイムサが喧嘩して……」

「まあ！？〈雷霊（ジエリイフォーフ）〉と〈嵐雲（ナッビエボロム）〉の喧嘩と同じくらい盛大ね！」

「〈雷霊（ジエリイフォーフ）〉と〈嵐雲（ナッビエボロム）〉？」

クワーレンはチャルーを放しながら言った。魔法動物オタクのマウリンは、「なにそれ！　どこにいるの？」と飛び跳ねた。

「あら、水晶玉の中よ！　封印されてるの。まあ、大した魔法動物じゃないけどね。二百年以上前のことだから、もうおじいちゃんよ。でも、喧嘩すると手を付けられなかったって、記述では……」

クワーレンは、割らなくてよかったと思った。

張り詰めていた空気は、徐々に緩んだ。エネーリスは目を赤らめ、リリは疲労を浮かべていたが、リトゥアーラは気に留めなかった。……もしくは、触れないようにしたのかもしれない。

「お腹が空いたんじゃない？　プェツアーからなにか貰った？　まだなの！？じゃあ、早くこっちにきて！　素晴らしいところに案内するわ！」

リトゥアーラは、さっさと階段を降りた。

「どうしたの？　さあ、早く！　ごみ溜めにずっといたら、いつの間にか埃になっちゃうわよ！」

誰からというわけでもなく、見習いたちは、この雰囲気の悪い場所から出ようと、見習い帽子を被り、彼女に続いた。

再び中庭に出ると、今度は正面の入り口に案内された。

「プェツアーは、すごく気前のいいアベドで、何でも作ってくれるわよ！　特製

フーラッカンを食べたらよかったのに！　彼は……そうね、料理を作ることよりも、提供することの方に意味を見出してるのよ！」

両開きの扉を開けると、大きな靴棚のある立派な玄関が広がった。暗く広い廊下がのび、リトゥアーラが持つ燭台の光に反射して、豪奢な照明が天井できらめいた。

さらに三階へと案内され、見習いたちは、一つの部屋に通された。

そこは、寝台の墓場と言ってもよかった。いろんな形の寝台が、あっちこっち好きな方向に向いている。

唯一感心できたのは、高い丸天井だった。そこには、太陽と、その周りを這うヤモリのような青い生き物が描かれていた。

「ここは、なに？」

リリは、雑然として埃っぽいこの部屋に、顔をしかめた。エネーリスも眉をひそめる。

「ちょっと寝台がお行儀悪いだけよ。布団に埃はかぶってないわ。さっき私がお仕置きしといたから！　……つまり、はたいたってこと！」

「え、待った。今日はここで寝ろってか⁉」チャルーが叫んだ。

「ドナウト師はどうしたの！」とエネーリス。

「はいはい、待って。それが複雑な問題一つ目」リトゥアーラは、人差し指を立

てた。

クワーレンたちは、ちょっとばかし互いの目を見やった。

「いい？　じゃ、みんな。そこに座って」

リトゥアーラは、近くの寝台を指し示した。六人は、膝を揃えて寝台に座った。

「ふむ、いいわね。まず、あなたたちの師のことだけど、心配はしなくていいわ。仮に心配をしても、そこまでしなくていい」

「どうしてなの？」

リトゥアーラは、エネーリスの問いに頷いた。

「彼は、自分の家に帰ったの」

「帰った⁉　どういうことだよ」とチャルー。

「家で仕事をしたいんだって」

「それで、僕たちはどうなるの？」

クワーレンに言われて、リトゥアーラは続けた。

「終わるまで、ここにいてほしいそうなの。たぶん、プェツアーと話していたのは、そういうことなのよ。でも、朝までには戻ってくるというから安心して！プェツアーの料理がもう一日食べられるわよ！」

見習いたちの間に、緊張が走った。これは、安心していいことなんだろうか？

ドナウト師は、『資料』の訳（やく）を終わらせようとしているのか？

しかし、それについては誰もなにも言わなかった。

「……で、複雑な問題は、他にもあるの？」マウリンが問うた。

リトゥアーラは、こくりと頷いた。

「複雑な問題二つ目はね、この雪がしばらく続きそうってことなのよ。どうも〈天守り（グロナーシュ）〉が問題らしいの。〈天守り（グロナーシュ）〉、知ってるでしょ？」

リトゥアーラは、天井の青いヤモリを指さした。

「ああ、知ってる！　空に住む魔法動物！……ほうら、あたしの言った通り。魔法動物のせいだって言ったでしょ？」マウリンは、隣のリリの肩を小突いた。

「〈天守り（グロナーシュ）〉が、どうやら海に落っちちゃったらしいのね。大御所にしてはずいぶんなどじだけど。まあ、とにかく、おかげでいままでの春日和は消えちゃったってわけ。そして、これから冬用の毛布を出さなくちゃいけないのよう！　きゃあ、なんてめんどくさい！」

リトゥアーラは手を叩いて立ち上がった。

「さ、夕飯はここへ持ってきてあげるわ！　あなたたちは、ゆっくり待っているのよ！」

彼女は、元気良く出て行った。

夕飯は、揚げリルクと、砂糖をまぶしたクルミ、ポウ、それからフーラッカンだった。

リトゥアーラは、古ぼけた陶製湯たんぽをそれぞれの寝台に入れ、さらに何枚もの毛布を重ねた。

「凍傷になったら困るもの！」彼女は歌うようにそう言った。

彼女の丁重すぎるもてなしにより、見習いたちは、ドナウト師や〈目〉のことを、わずかながら忘れることができた。本当にわずかに。

リトゥアーラは、さらに言うのだった。

「あたしは下にいるから、なにかあったら、遠慮なく床を蹴ってちょうだいな！」

彼女は、長いトルモの下で、軽やかに足を踏んで見せた。

タカタ、タカタ、タッタカタ！

「じゃあ、おやすみなさい、小さな旅人たち！　夢の中で桃源郷が現れ、自らが望む姿になり、世界を謳歌する様が今夜、実現されんことを！」

「え、なに？」

リリが困惑して寝台から起き上がったが、リトゥアーラは、歌いながら部屋を出て行くのだった。

「あれは、ヤムセムトゥワーレの呪文だよ」

樫の木寝台に横になりながら、クワーレンは言った。

「だれだ、そいつ」

クワーレンの寝台と直角に置かれた天蓋付き寝台で、チャルーが訊ねた。

「あたし知ってる！　『尾骨獣（びこつじゅう）の大戦』に出てくる魔法使いだよね！」

そう言ったのは、チャルーの足元の毛皮の寝台で寝るマウリンだった。

クワーレンは、嬉しくなった。

『『夢の中で桃源郷が現れ、自らが望む姿になり、世界を謳歌する様が今夜、実現されんことを』。彼はそう言って、戦いの前にいい夢を見せようとするんだ」

「へえ。で、尾骨獣（びこつじゅう）ってなんだ？」とチャルー。

「めっちゃしっぽが長い、巨大な獣だよ。そいつらを狩るために、いろんな種族が戦う、そういう物語なんだ」クワーレンは答えた。

「ねえ」

ふと、壁際で眠るリリが言った。

「リトゥアーラを、信用していいと思う？」

「どういうこと？」彼女の近くにいるエネーリスが訊ねた。

リリが暗がりで起き上がった。

「少なくとも、彼女は下にいる。けれど……本当に……〈目〉がきたら、大丈夫なのかな？」

みんなが避けてきた話題を、とうとうリリは口にした。

「ドナウト師は、訳(やく)を終わらせに戻ったのかもしれねえ」
言ったのは、窓際の質素な寝台で丸くなるイムサだった。
「じゃあ、〈目〉は来ないってこと？」エネーリスが小さく訊ねた。
だが、だれもたしかな答えをもっていなかった。
「あたし、平気だと思う！　だって、リトゥアーラは師の人だよ！？　ドナウト師も師の人だし。なんとかしてくれるよ！」
マウリンの明るい声は、重苦しかった空気を徐々に除けていった。
「そうね。リトゥアーラ、まだ寝ていないみたいだし」
エネーリスが床を静かに指した。
たしかに、耳を澄ませると、ごとごとと、そそっかしい物音が聞こえてきた。
その音は、見習いたちに安心感をもたらした。彼らは、ゆっくりと眠りについた。
一方イムサは、降り続ける雪を、じっと眺めていた。見続けていると、自分が落下していくように思えた。
イムサは、狩の村の管理塔で〈野駆(のか)け〉と交わした、最後の会話を思い出していた。
……「君はいい子だな」
そう〈野駆(のか)け〉が言ったあと、彼は、続けて言った。

「よく眠れているか？　平気か？」
イムサは、その問いに眉をひそめた。〈野駆け〉の目の中に浮かんでいた後悔の色が強くなっている。
「眠っています。大丈夫です」イムサは強気になって言った。
「本当か？　無理をしているんじゃないだろうな」
「いいえ。なぜです？　俺は、聞いたことを話しているだけですよ」
「だが、普通、このような状況に置かれたら、戸惑いと不安で気が狂うはずだ。なのに、君は、こちらに訊ねることもなにもしない。その姿勢に感謝はしているが、逆に俺は、不安にも思っている」
「一度、〈見えない死〉のことを訊ねましたけど」
「ああ、ああ、覚えている。だが、一度だけだ。俺が言ったことを、君はすぐ飲み込み、理解する。そして無言で従うのだ。なぜだ？」
「あなたがそうしろと言ったから……」
「そうだ。だが、俺が言いたいのはそうではない」
〈野駆け〉は、イムサに向き直った。
「君は、俺に従うことに苦痛を感じていないのか、ということだ」
〈野駆け〉は、ため息をついた。
「……君は、見習いという大事な時期に、友や師に、完全に腹を割って話すこと

ができない状況に陥ってしまった。あろうことか、君は知ってしまったからだ。
俺は、君の青春を奪った。協力しろと言った俺には、君の精神的負担を取り除く責任がある。……本当に、お前は、なんとも思っちゃいないのか？」
「思っていたところで、なんて言ったらいいかわかりません。でも、友達のことかは、別に苦に思っていません。話せないのは、仕方のないことだから」
「……君は肝が据わっているというかなんというか……」
イムサは、どうも自分の気持ちを受け止めてもらえていないような気がした。
「なぜいま、こんな話を？」イムサは、怒りを抑えて言った。
〈野駆け〉は、ちょっと眉を上げた。
「悪かった。だが、経験から言っているんだ。俺も何度か、大事なものを捨ててここまでやって来た。おかげで、あのときああすればよかった、こうすればよかったと―一人で仕事するようになってからは思わなくなったが―そう悩む時があったんだ。だがやはり、他のアベドを、俺のようなアベドにしたくないのだ。
……一人で追い続けるアベドには」
「後悔していることがあるんですか」
「わからん。仕方がなかったのかもしれん。影の人の見た俺の定められた道では、避けがたいものだったのかも。……だが、もう少し、俺はなにかやれた気がする……」

最後の方は、消え入るような声だった。

その顔を思い出しながら、イムサは、心の中で、彼の名前を呼んだ。口外してはならぬと言われた彼の名前。述べることのできぬ名前。

（あなたに会いたい。俺は、俺たちは、これからどうすればいい？　教えてくれ……〈野駆け〉のダーング！）

◆

（〈野駆け〉のダーングっ）

師の村の住宅街を、背を丸めて歩く老人は、心の中で悪態をついた。

重そうな外套で、早歩きをするその老人は、師の人ドナウトだった。彼は、凍てついた空気に肌を切られそうになりながらも、焦りで体中嫌な汗をかいていた。脂ぎった髪は、のっぺり、横へ後ろへと乱れていた。

だが、彼の決意は、かたいものだった。彼は、この決意をゆるぎないものにさせた〈野駆け〉のダーングの顔を思い出し、舌打ちをした。

ダーングに会ったのは、狩の村の『おこじょの瞳』だった。宿の食堂で昼食を取ろうと席に座った瞬間、目の前に、男が影のように現れたのだ。

くたびれた外套を着、伸びた癖毛を後方で縛った、粗野なアベドだった。男は、

胸に三本指を当てると、こう言った。
「お邪魔してすみません。私、守りの人のダーングという者で」
ドナウトは、顔をしかめた。
「……なんだ。汚い格好をして。お前なんか知らん。私の前から去れっ」
だが、ダーングは、わずかに屈みこんで小声で言った。
「〈野駆け〉、と言ったら、少しはここにいさせることを、考慮しますか？」
「……〈野駆け〉が私になんの用だ？　私が王家を裏切ることを、なにかしたか？」
ドナウトは、白の外衣を引き寄せ、足を組んだ。ダーングは、去るどころか、まるでそうすることが自然であるかのように、目の前の席に座った。
「とぼけている場合じゃありません。あなたの選択によっては、多くの者が悲惨な目にあいます。私はそれを、止めに来たんです。すでに見習いたちには、別の宿に移動してもらいました。……あなたの選択によって引き起こされることから守るために」
「……」
「仕事の方は順調ですか」
「なに馬鹿なことを聞いている。君に関係ないだろう」
「いいえ、大ありです。というより、エイネー全体に関係あります」

「私の仕事がか？　へ！　そりゃ一大事だ！　……いまさら遅いわ」
「なんですって？」
「いいや、なんでも」
ダーングは、ため息のようなものをついた。そうして、ドナウトの方にわずかに身を乗り出した。
「あなたが手にしたあの『資料』は、エイネーに再び争いを引き起こしかねない火種だ。あなたもそれをわかっているはず。だから、向こうへ渡すことをためらっているんでしょう」
ドナウトは、鼻から息を吐き、椅子の背にもたれた。
そこへ、宿の給仕の者が注文を取りに来た。
「ペニャッツ酒を一杯」ダーングは給仕に言った。
「私はいらん。水だけくれ」
給仕の女アベドは肩をすくめ、睨み合っている二人を残して去った。その背中に、ドナウトは叫んだ。「これは私の連れじゃないからな。勘定は別にしてくれよ！」
「……で、どうするつもりなんです」向き直ったドナウトに、ダーングは声を潜めて訊ねた。
「なにがだ」

『『資料』をどうするかということです。あなたは、何度も彼らに要求され、その度に時間稼ぎをした。私にはわかりません。なぜ訳(やく)し終わっている『資料』を、彼らにさっさと渡さないのか。……ええ、私は知っていますよ。それがどこに保管されているかも。わざわざ確認したんだから。それなのに、あなたは家を飛び出して、その〈研究員〉という役職とお歳では珍しい、村回りの仕事に走ってしまった。元気の塊のような、手に負えない新見習いたちをまとめて旅をするという、過酷な仕事に」

ドナウトは、なにも言葉を発さなかった。ダーングは続ける。

「正直、なにか目論んでいるのかと思いましたよ。彼らに渡さず、延々と逃げ続けるあなたには、なにか目的があるのかと。けれど、あなたに協力するようなアベドは見当たらず、あなたは逃げてばかりで、なにもしなかった。……あなたは、ただ時間を稼いでいただけなんだ。できるだけうまい避け方を見つけるために。……本当は、わかっているんでしょう？　彼らに――〈緑の巨人〉に『資料』を渡せば、一大事になることを。だから、こんなにも引き延ばしてきたんだろう」

ドナウトは、小刻みに足を揺らした。

「胸糞悪い連中だ。お前もやつらと同類だ。お前は、『守る』とさっきほざいたが、こっちとしては大迷惑でしかない」

「私は、あなたや見習いたちに、無意味な死を遂げてほしくないだけです」

「見習い？　はは、なんの話かね」ドナウトは、食事台をせわしなく撫でた。

『あなたの命と引き換えだ』と脅かされながら、それでもあなたが拒絶した場合、彼ら〈緑の巨人〉は、次は見習いを使うつもりです。相手の近くにいるアベドを使ってゆするという卑劣なやり方は、彼らのよくやる手口だ。実際、過去にもそんなことが起こっている」

「……では、君はどうしようというのかね。まさか、見習いを他の宿に移すだけが君の仕事じゃないだろう。なにしに来たんだ。君の目的はなんだ」

ダーングは肩をすくめた。

「まあ、そうですが。目的などは口外できません。職業柄」

「ふん、王家の犬が」

ドナウトはぼやいたが、ダーングは無視した。

「ですが、これだけは言っておきます。私は、〈緑の巨人〉の圧力からあなたたちを助ける方法を知っている、そのためにここにいるのだ、と」

「はてさて。見上げたもんだ。だが、君の行く道は泥沼だと、私は思うね」

ダーングは、片眉を上げた。「まあ、そうかもしれない」彼は呟いた。

「それで、君の言うお助けの道とは、どのようなものなのかね？」

ダーングは、それにはすぐに答えなかった。給仕のものが飲み物を持ってやって来たのだ。

彼女が立ち去ると、ダーングは口を開いた。ドナウトは、求めていたように水を飲んだ。

「……『資料』を、こちらに渡してほしいんです」

「はっ！　何を言うかと思えば！」ドナウトは、咳き込んで言った。

「渡してくだされば、〈緑の巨人〉も、こっちでかたをつけます。だから、あなたは村回りを続……」

「おいおい、待て。私がその要求を素直に従うとでも思っているのか？」

ダーングの顔が強張った。「なに？」

ドナウトは、鼻で笑った。

「あの『資料』の翻訳は、もともと私の趣味ではじめたことだ。それを、横から手を出す連中が、やつらであり、お前だ。……いいかね？　いままでこつこつとやってきたものを『はい、どうぞ』と受け渡す阿保がどこにいる？　私のことをいろいろ調べたようだが、それならば、私の隠れた経歴も知っているだろう。なのに、あんたの要求を呑むとでも思ったのか？　私が〈緑の巨人〉を離れたからか？　君は、〈野駆け〉として数多くの情報を手にする方法を知っているようだが、他者の気持ちにはとことん疎いな。……私は、やつらもお前も、どちらも信用せん。どうしてもというなら、最後まで自分の手で握っていて、共に焼かれてやるわ」

「なにを言うかっ……！」

だが師の人は、瞳をぎらつかせた。

「いいや、私は本気だぞ、〈野駆け〉。村回りの途中でも、私は死ぬ覚悟ができている。……まあ、〈目〉にはやられたくないがな。名誉というのがあるから」

「見習いたちをどうするつもりだ。いままで数日の間教えてきたんだろう？　それを、死をもって終えるつもりか？　あんた、見習いに与える影響の大きさが、わかっているのか⁉」

「彼らは悲しみはしない。なんなら、残りは君がやればいい。馬鹿みたいに情報をたくさん持っていそうだからな。適任じゃないか」

「私は彼らを教えられない。私は守りの人だ！」

「そうやって、エイネーは滅んでいくのさ」

ドナウトの言葉は、だが、ダーングには届かなかった。〈野駆け〉は、ドナウトの後方を見ていた。

宿の入り口に、二人のアベドが立っていた。あたりを見渡し、受付の案内には注意を向けず、なにかを探している。

ダーングが舌打ちした。ドナウトも、息を吐いた。

「なんてことだ……。宿は教えなかったはずなのに。待ち合わせは玄関口のはずだ」ドナウトは、急いで彼らから目をそらした。

「……どこからか情報が漏れたのかもしれん。……。こっちへ来る」ダーングは言った。

「ドナウト師、お久しぶりです。見習い村以来ですな」

男の方が挨拶をした。ダーングに目を向ける。「失礼ですが、あなたは？」

「やあ。つくりの人、〈歌語り〉のヨアナァーンだ。どうぞよろしく」

ダーングは、さらっとそう言った。

「楽器を持っていないようですが」

即座に女の方が言った。冷たい石像のような彼女は、ヨアナァーンと名乗った男を、つま先から頭のてっぺんまで、じろっと眺めた。

「私は、声だけで語るのです。よかったら、あとで一つお聞かせしましょうか？『〈天守り（グロナーシュ）〉と〈太陽水（ウナーリェスト）〉』などは？」

「いいや、結構です。すまないが席を外してもらえませんか？　私たちは、彼と少し、話をしたいのです」

そこで、いまではヨアナァーンを名乗る〈野駆け（のか）〉は、なんともいえぬ残念な顔をした。

「それはできかねます。実はいま、〈歌〉の途中でして。席を離れられないのです」

それを聞いて、二人の師の人は、はっとし、また苦々しげな表情をした。

〈歌〉は、エイネーでとても重要視されている娯楽だった。歴史や物語を、歌って語ることを仕事とするつくりの人、通称〈歌語り〉が、楽器、または声のみを使って、各地で聞かせ回る芸の一つだ。

しかし、〈歌〉には決まりがあって、それが、〈歌〉の中断をしてはならない、というものだった。中断した者や、中断した〈歌〉を聴いた者の命を、魔法動物が吸い取ると昔からの言い伝えがあり、慣習としては、〈歌語り〉が語り終えるまでは、どちらも席を立ってはいけないのだった。

〈歌語り〉という職名が、あまり探りを入れられず、また受け入れられるのは、尊重され、敬意を表さなければならない職種だからだ。だから、あまり突飛なことを聞いてはならない。なぜなら、〈歌語り〉の怒りをかうことは、魔法動物の怒りをかうことと同じで、自分の命を危うくすることになるからだ。

ドナウトは、心の中で呻いた。〈野駆け〉は、この点をわかったうえでやっているのだ。

師の人らは、納得するしかなかった。

「……では、手短に話しましょう。例の件ですが、完成したのでしょうか？　お渡し願います」男が、かなり言葉を濁して言った。

ドナウトは、生唾を飲みこんだ。

「実は、時間をとるのが難しくて……ほとんど手をつけていないのだ。村回り終

盤になれば、落ち着いて時間も取れるとは思うが……」

男は厳しい目つきで見下ろした。

「言ったはずです。我々はもう待てないと。……正直言って、あなたには失望しました。これを続けて失うものは、大きいですよ。どうするつもりなんです？」

「……師の村になら、参考文献がある。それでもよければ渡せるぞ」

師の人二人から、呆れのため息が出た。

「なんですかそれは。まったく。……お話になわないわね」女が嫌味たらしく言い、男を見上げた。

男は、ドナウトから目を離さず、鼻を鳴らした。

「本気で言っているのか。ならばなぜ、もっと早くそのことを言ってくださらなかった」

「あの『資料』がいるといったのはあなた方だろう。だが、参考文献までほしいとは聞いていない」

「関係する資料はすべて渡してほしいと、我々は言ったんですよ」男はドナウトを睨みつけた。

ドナウトは足を揺らし、顔をそむけた。師の男は、呻き声を漏らした。

「言っておきますが、こんなにも我々を振り回した罪は、重いですよ」

男は言い放つと、さっさと離れていった。

代わりに女がそこに残って、ドナウト師に詰め寄った。
「師の村に、何日後に着く予定です？」
「み、三日後、三日後には着くだろう」
「三日後。三日後に、あなたの家の前でよろしいですか」
「ああ、だが、予定は狂うかもしれん。なんたって、見習いも……」
「ええ、そう。見習いを思うことは大事です。けど、あなたの行動によっては、彼らも迷惑するんです。それを踏まえてものを申すことですね。約束を覚えておいでで？」
「ああ。わかってる。ちゃんと三日後には着く」
「夜中に向かいます。それでは」
彼女はそう言って、颯爽と去っていった。
彼らが宿を出ていくと、ドナウトは重く長く、ため息をついた。
「なぜまた同じことを繰り返す！」ダーングは迫った。「これでは埒が明かないぞ！　あなたはなにがしたいんだ⁉」
「君にはわかるまい。彼らのことも、私のことも」
「あんたというアベドは……。……だが、ああ言って、渡す気はないんだろう？」
「もちろんだ。あれは、私がはじめ、私で終えるべきものだからな」
「……向こうにも、私にも渡さない。けれど、期限を三日後まで伸ばした。一体、

あなたはどうするつもりだ？」

ドナウトは、肩をひくつかせて笑った。

「言っただろう。私は、あれとともに消える覚悟ができていると 。だからお前も、どうにかなる前にここを去った方がいい。〈緑の巨人〉は、お前も知らない手を使うからな」

ドナウトは、席を立った。食事をする気分ではなかった。

次の日、「三日後に師の村に」と言ったが、ドナウトは、もう師の村の地面を踏んでいた。

『資料』は、だれにも渡さない。あれは、自分の手で燃やすべき代物だ。光の民（シスルア）にも、〈緑の巨人〉にも、あの『資料』は渡ってはいけない。

白く染まる村で、ドナウトは一人、頷いた。

なにもかも、計画通りだった。